

子供の病氣怖るべからず侮

るべからず

醫學博士 竹 内 薫 兵

○ 「空襲怖るべからず、侮るべからず」云いふのが、今のこの大東亞戰爭に於ける、防衛部の空襲に對する指導方針である。聞かされて居ります。「怖るべからず侮るべからず」は、何も空襲に限らず、凡そ敵名名の付くものに對しては、いつでもこの覺悟でなくてはならぬのであります。この度特に防衛部がこの言葉を強調されたところを以て見るに、現時特に空襲に對して怖れたり侮つたりする傾向が國民にあると思はなければなりません。この考は飽くまでも是正すべきであります。

これと同じことが子供の病氣に對する親御さん達の考についてとも言へるのであります。つまり、子供の病氣云いふものに對して、必要以上に怖れたり、又侮つたりする。このために致して親御さん達云いのみならず、子供の周圍の方はさの位無駄な心配や手数を費してゐるか判りません。この

心配や手数の影響は、之をなさる周圍の方々にも惡結果を來たすのみならず、子供自身の心身兩面に取つて非常に面白くないことなるのであります。

こゝにいふことなるのは、子供を直接取り扱ふ方々の、子供の病氣に對する知識の不足から來ることは勿論であります。知識を持つ前に子供の病氣に對して、「怖るべからず、侮るべからず」云いふ根本觀念をしっかりと據えておくことが肝腎であります。この根本觀念を強く基礎づけるために、子供の病氣の場合に來る主要症候を少し擧げてお話することになります。

一、熱怖るべからず

病氣云いへば熱、熱さきけば病氣云いふやうにいつも關聯して考へられ、いつも關聯して怖れられてゐます。熱さへなければまあよかつた。蘇つた氣持になる人が随分多いのであります。いかにも熱は病氣の一面であり、病氣でな

いの熱の出るこゝはありません。あたかも戦の時の大砲の音のやうなもので砲聲は必ず戦を意味します。憶病者は砲聲を聞くま直ぐにスハ敵襲ミ怖れ慄くでありませうが、思慮あり沈着な軍人は、先づ敵が味方が見極めて、さて適當に處置を取るのでありませう。熱は身體に病氣在るを示す砲聲に相違ありませんが、奚ぞ知らん、この砲聲は、味方を攻撃して来る敵襲ではなくして、病氣まいふ敵を撃退しやうま努めてゐる有り難い味方の砲聲なのであります。この砲聲を悪んだり、或は止めさせようとするのは忘息行爲でもあり、功利的に考へれば實際損なこゝである。

もつミくドシく打つて下さいま大砲に頼んでよいわけである。しかし、あまりひびく、しかも耳の傍で打たれたりするま、却てこちらの耳の鼓膜を破つたり、頭へ響いたりするから、敵を打ち拂つてくれる大砲まはいへ、先づよい加減に打つて貰つておきたい氣持になる如く、熱も病氣を追つ拂つてくれるは有り難いが、あまり高熱が続いては却て身體に障るこゝがある。こゝいふ場合や僅かな熱でもひびくからだにこたへるやうな時無理にも熱を下げる工夫をするのである。

實際、熱そのものが身體を害するまいふこゝは、こゝいふ場合の外はないものである。小供は大人ま異つて熱に對する抵抗力が相當に大きい性質を持つて居るから、一寸熱

があるま云つて大騒ぎするやうなこゝは無益であるばかりでなく、今申した通り、むしろ子供のために有害である場合の方が多いのであります。

況して、二分や三分の昇降を、一聲一笑するまぎ愚の骨頂であります。

熱の出た場合、醫師が要求する手當は別であります、それでない限りは、只靜かに子供を寝かしておくこゝがよいので、水枕を頭にあてるこゝは害ありません。水枕に至つては必しもおすゝめいたしません。むしろそれは醫師に診察を受けてから、醫師の意見に従ふこゝました方が安全であります。

二、咳怖るべからず

咳をするま百日咳ではないかま怖れ、肺病にかゝつたのかま怖れ或は肺炎ではないでせうかま怖ろしが方が多いのであります、この中まの病氣でも決して咳ばかり出るものではありません。必ずいろくゝな容體が附屬して来るものですから、咳が出るまいつただけで、少しも怖れるこゝまありません。そんな病氣でも咳そのものゝために子供が命を縮められるやうなこゝはないであります。

咳の出て来る場所は咽頭や喉頭に在るこゝもあり、或は氣管、氣管枝、毛細氣管枝、肺胞なまいろくゝあります。

咳を止めるためには、この咳の出處をつきとめて、そこに對する手當をすることが何は措いても爲すべきであります。が、その外、咳に對する共通な手當としては、清淨で寒くない温度の空氣を呼吸することです。無闇に部屋を閉め切つたり、炭火をさし／＼焚く部屋に咳の出る子供を置いたのでは咳の治りませんのは、第一こゝにいふ譯だからであります。

三、下痢怖るへからず

大便が何度も出る。これを下劑さはいひません。便そのものが軟かい又は水の様だま下痢さいひます。必しも回数には關係しませんが、こゝ云つた便は回数が多くなるものです。しかし、下痢は怖るべきではありません。一日に十回かもつこ出るやうでは、それだけで子供の身體は疲勞しますが、僅かの回数なら心配するに及びません。心配するに及ばないまは醫師にも見てもらはないで放つこいてよいまはふこころではありません。

下痢の手當はいかなる場合でも、食べ物、飲み物に重點を置くのでありますが或は飲食物に限るこもいへる位です。飲食物の注意さへすれば治るこもいひ得る位です。

しかし、それよりも著るしいこは、近頃の母親の方一概に云つてもよいほゞ、乳兒の便の青いのを氣にする傾向です。乳兒の便が少し青ばんだのが出ますま、この便

は病氣の便だと思ふらしいのです。「こゝも近頃赤ん坊の便が悪いものですから」なまゝ訴へて來るから、その悪いまはふ便を見ますま、ナアんだ、普通便へ少し青味が／＼つてるだけのこが、實に屢々あるのです。乳兒の便は青くてもよいのです。青便が出るから脚氣だま定めるこなきは、大間違です。青便も普通の中だま思つて斷然差支ありません。

それから病にもう一つ申添へますが、母乳を検査するこ脚氣があるか判るか判るなき／＼稱へて、母乳を検査して、何さかいふ藥を入れるこ脚氣の有る無しが色で判るなき／＼御叮嚀に料金まで取つて検査してゐるこころがあるま聞きますが、そんな一寸した位のこで母乳検査から脚氣が判るものでなく、學會はまだ決して認めてゐない方法ですから、母親の方は迷はないやうに願ひたいものです……まはふこころです。

四、便秘怖るへからず

便通の遠いこを便秘ま申します。それでは幾日位無ければ便秘かま申ますま、別にそれについての規則がある譯ではありませんが、日頃ある回数より少ければ、その子供には便秘であります。従つて日頃一日一回あつた子供に一日一回なく、二日に一回まなればその子供には便秘であります。三日に一回の子供に、二日に一回あつたのでは便秘

ごころか、普通以上よい便秘さいふべきです。

ごころが、さういふものか、一日一回を法律でよもあるかのやうに考へて、一日一回の便通がなければ何かエライ事でも起るか、起こつたかの如く考へる母親の方が澤山にあるごころを私は知つてゐます。さういふ方には、熱が出るごころは便通のないせい、頭が痛くても、元氣が無くなつても、凡て子供の病氣の數にはすべて罪を便秘に歸しやうごしてゐる方があるごころも屢々です。そんな無茶な獨斷をやつてはいけません。便秘するには便秘した方が、子供の身體に都合だから便秘するご思つてなるべく自然に出るまでそのまゝにしておくがよいのであります。私は一週間位は、そのまゝにして、決して灌腸なごしない方がよいご平素お勧めしてゐます。灌腸さいふごころは便秘を助長ごすれ決して便通をよくする手段ではありませぬ。のみならず灌腸によりて病氣の傳染を起こすさいふ危険さへあります。

しかし、便秘に對して、拱手傍觀するのはよくありません。矢張り手當だけはすべきです。その手當の中、醫師のやるごころは別ごして、家庭では、矢張り飲食物を變へてかかるが最も大切で、さう變へるかは自ら別の項目になりますが……。

五、痙攣怖るべからず

痙攣怖るべからずご、一概に痙攣(即ちひきつけ)さいふ容體を斷定して終ふのは、實は少し輕卒かも知れない。何ごなれば痙攣はいつも腦に於ける所謂痙攣中樞の刺戟現象であつて、この刺戟は必しも輕い意味の原因からのみ起こるさいへないからである。然し、少くごも、痙攣だけで外の容體を交へない場合には子供の生命に對する危険はないものであるごころは云へるのであります。さいふ意味では痙攣怖るべからずさいへる譯であります。

○

こう竝べて來るご、主な子供の病氣の容體の何一つ怖るべきものはないのであります。それでは子供の病氣になつた場合怖ろしくないものかご放置して見て居ればよいかごいふご必ずしもそうではないのであります。何ごなれば、以上述べた子供の病氣の主なる容體さいふべき五症候は、單一に來る時は怖るべきではないが、この中、二つ以上が合併して來るご、こゝに始めて侮るべからざる子供の病氣を形成するのであります。

例へば、熱ご咳ご合併して來ますご、悪性流感も肺炎も一應は考へなければならぬのであり、熱ご下痢を伴ひ來れば、赤痢も疫痢もそうなのであります。その他咳ご下痢、熱ご便秘、或は熱ご痙攣。下痢ご痙攣ご咳なご、この五症候の中を二つか三つ取つての順列や組み合せのされもがそ

れぐ一つづの病氣となり、又同じ病氣でもそれぐ軽重があるのであります。それ故その數は(即ち病氣の數非常に多くなる。剩へ、私の擧げた症候(容體のこころ)は僅に主要なる五種に限つておきましたが、之を、五種に限らず、吐きまか痛みまか不眠まか食慾不良まか、もつこ多數の容體を擧げて、それ等多數の症候の順列、組み合せを考へるま、その一つづが一つの病氣まなつて來るのであります。病氣そのものに(即ち病名が定まれば即座に)軽い重いがあるものでもあり、又、同じ一つの病氣の中に軽度の別のあるものでもあり、又々、同じ病氣でも、罹つた子供の體質で軽い重い別れるまもあります。

こゝにいふ譯になりますから、容體の多くから成り立つてゐる病氣は仲々に侮り難いものであります。ほんまうに侮り難い病氣か、否、輕蔑してよい病氣かは、いつもその病氣にかゝつてゐる子供々々で違ひますから、その都度お醫者が診察して決定する筈でありますが、家庭に於ける子供の周圍の方々ま雖一應の心得は必要であります。

私の述べたまは、約言すれば、「單一容體怖るべからず、複合容體侮るべからず」まいふまになりま。

詳しく云へば、しかし、ほんまうにその子供が、單一容體であるが、外に容體はないかまいふまを決定するのは、醫師でなければ出來ないまはありますが、家庭人

ましては、ごく大雜把に單一容體、複合容體まいふまにだけでも着眼していたまきたくこの一篇を草した次第であります。

保姆先生の健康

子どもを健康に。といつしよに、保姆先生の健康も大切ですね。それは、貴女のためであると共に、子どものためです。子どもをほんどうに丈夫にするには、保姆さんが先づ丈夫でないまむつかしい。

健康は生理的問題であると同時に、心理的問題ですね、先生の顔色が、動作が聲音が、それ以上、精神力が、充分健康でないま、子どもも自然弱くなります。

病菌の傳染、その方のまは私にはよく分らないが、病氣の感じの傳染は、心理的のまです。先生が病菌をもつてゐては固る。それを子どもに撒きちらしてはたまらない。しかし、陰氣くさい、元氣のない、不健康な心持ちが、周圍の子どもを病氣にするまも、よく考へて置かなければなりません。

薬と手當のまは私には全く分らない。しかし、健康な血色や、健康な笑ひ聲が、子どもの大抵の病氣を治すのに、大きな效力のあるまは確かです。幼稚園常備薬として是非そなへて置くべきまものです。

受持ちの先生のからだが弱い程、子どもらに氣の毒のまはありませぬ。

(くらはし)